家族読書　第一回

朝は、いつでも自信がない。寝巻のままで鏡台のまえに坐る。眼鏡をかけないで、鏡を覗くと、顔が、少しぼやけて、しっとり見える。自分の顔の中で一ばん眼鏡が厭なのだけれど、他の人には、わからない眼鏡のよさも、ある。眼鏡をとって、遠くを見るのが好きだ。全体がかすんで、夢のように、覗き絵みたいに、すばらしい。汚ないものなんて、何も見えない。大きいものだけ、鮮明な、強い色、光だけが目にはいって来る。眼鏡をとって人を見るのも好き。相手の顔が、皆、優しく、きれいに、笑って見える。それに、眼鏡をはずしている時は、決して人と喧嘩をしようなんて思わないし、悪口も言いたくない。ただ、黙って、ポカンとしているだけ。そうして、そんな時の私は、人にもおひとよしに見えるだろうと思えば、なおのこと、私は、ポカンと安心して、甘えたくなって、心も、たいへんやさしくなるのだ。

だけど、やっぱり眼鏡は、いや。眼鏡をかけたら顔という感じが無くなってしまう。顔から生れる、いろいろの情緒、ロマンチック、美しさ、激しさ、弱さ、あどけなさ、哀愁、そんなもの、眼鏡がみんな遮ってしまう。それに、目でお話をするということも、可笑しなくらい出来ない。

眼鏡は、お化け。

自分で、いつも自分の眼鏡が厭だと思っているゆえか、目の美しいことが、一ばんいいと思われる。鼻が無くても、口が隠されていても、目が、その目を見ていると、もっと自分が美しく生きなければと思わせるような目であれば、いいと思っている。私の目は、ただ大きいだけで、なんにもならない。じっと自分の目を見ていると、がっかりする。お母さんでさえ、つまらない目だと言っている。こんな目を光の無い目と言うのであろう。※たどん、と思うと、がっかりする。これですからね。ひどいですよ。鏡に向うと、そのたんびに、うるおいのあるいい目になりたいと、つくづく思う。青い湖のような目、青い草原に寝て大空を見ているような目、ときどき雲が流れて写る。鳥の影まで、はっきり写る。美しい目のひととたくさん逢ってみたい。

※たどん…炭の粉を丸めかためた燃料。漢字で表記する際は「炭団」と書く。

※裏面もご覧下さい。

問題

この文章は、ある小説の一部です。誰の何という作品でしょうか？

作者名　「　　」

※ヒント：漢字三字です。明治生まれで、昭和に国語の教科書（中二）にも載っている大変有名な作品を生みました。

作品名　ア　夢十夜　※三択です。
　　イ　美少女
　　ウ　女生徒　「　　」

※答えは「家族読書　第二回」に掲載します。

寸評

今回の作品の主人公「私」は、十四歳の少女です。彼女の、朝起きてから眠りにつくまでのとりとめのない考えなどが日記のように描かれています。自己嫌悪と憧れ、大人と子ども、依存と自立――絶え間なく揺れ動く「私」の心情が繊細かつリアルに描かれています。

この作品に出会った時、私は自身の少女時代を思い出しながら読んでいたのですが……まさか作者が、かの有名な「〇れ〇ロ〇」の作者と同一人物だったとは！

感想

※（　）内に感想を書いた方のサインをお願いします。

（　　）	（　　）
（　　）	（　　）